



きのバンガロー生活だ。ご主人自ら屋外の炉で焼いている肉の塊を横目に、芝生の上でくつろぐ。ほのかに木の香が漂う食堂の、特大のガラス窓から暮れていくロブソン山を眺めながら、とりどりの食卓に満足した。台所ではアルバイトの女子学生たちが、かいがいしく働いている。蜜を求めて絶え間なくハチドリが飛んでくる。

牧場の外れに熊が来ているという声に急いで駆けつけたら、熊の方で驚いて、後をふりかえりながら森に消えてしまった。

エンペラー・フォールズのキャンプ場

ロブソン直下、ロッキーマ最大の滝へテントを担いで一泊のハイキングだ。ロブソン川のあたりのトレール・ヘッドで駐車して、まずキニー湖へ。湖までは緩やかな登りで、道端には日本の山でもよく見かける草花、茸が多い。えぞ松に似たス

ブルース・バルサムにまわりついている薄緑色のサルオガセが見事だが、木にとっては大敵だ。

ラズベリーを摘んで口にする。キニー湖の入口のキャンプ場は、現在「リハビリテーション」のため休養中だった。湖の水が道にまで溢れ、半ばから折れた立木が山道を塞いでいて、冬の厳しさを物語っている。可隣なコロンバイン、アルパイン・ファイアウッド、インディアン・ペイント・ブラッシュの赤い花が、緑を背景に映える。河原のワタスゲが、疲れを癒してくれた。

クリークにかかる板橋、溪流の吊橋を渡って急な登りを終えると、忽然とエンペラー・フォールズが目の前に現われ、飛沫をあげて轟いている。その僅か上流にやっと見つけたキャンプ場は、道の側に数か所のテント場と丸木造りのトイレ、何かの動物に三分の一かじられた「火気厳禁」の立札、食料を野生動物から遠ざけて空中にぶら下げて置く簡単な設備のベアプルーフしか無い、簡素なものだ。

トレール・ヘッドから八時間の登りだった。小雨の中で、ロブソンにこたます雷鳴を聞きながらテントを張る。白く濁って手を切る冷たさの川の水を汲んでつくったホットチョコレートで、やっと生気をよみがえらせた。ここまで来ると



ほとんど人に会わない。今晚の利用者は私たちだけらしい。

明けて午前中は、さらに奥のバーク湖まで小一時間のハイキング。マーモットが岩に見え隠れしていた。バーク湖の河原からは、ミスト氷河、バーク氷河が手にとるように近い。ロブソンの頂はガスの中だった。風が強く、セーターにヤツケでも寒くて、とてもじっとしてられない。山慣れしている感じの若い夫婦が、しっかりと足どりでやって来る。夫の背には山ほどの荷物。母親の背でニコニコしている幼児に、ハイイ！と手を振って挨拶した。

突然、爆音がこたまして、ヘリが飛来した。さすがロッキーマのレンジャーは巡回も大がかりである。笑いそうになる膝を励ましながら、ランチに帰着したのは六時。どうか夕食に間に合った。

設備の整ったワピティ・キャンプ場

ジャスパー国立公園の入口のゲートで、車一台二ドル也の入園料を支払う。四日間有効のシールに合わせて、「あなたは今、ベアカントリーにいます」の注意書

も手渡された。ジャスパーは登山客の客も多い明るい霧囲いの町だ。ハイウエイ93号とアサバスカ川に挟まれた林のワピティ・キャンプ場は、アルファベットのAからYのセクションに分かれ、ざっと数えて三百四、五十か所が駐車キャンプができる。温水の洗面所が八、調理棟四、給水新置場が十九、電話三、シャワー棟一、おまけに野外劇場つきである。

各々のセクションは車で連絡ができ、歩き回って草木を痛めないよう歩道もある。鉄製の大型ゴミ箱は重たい蓋でカバーされていた。食料は必ず車のトランクにしまっておく、夜十一時以後は必要最小限の物音しか許されない。最長滞在期間は十四日間、チェックアウトは午前十一時——などと書かれた印刷物が登録所で渡される。因みに、二台のセタンが支払った利用料は二十三ドルだった。薪は大きいので、斧が必要だ。お隣りのキャンプ場にお願したら、快く貸してくれた。お札に和紙の折り鶴を差し上げたから、大喜びだった。

ここを基地に、エンジェルが翼を広げた姿の氷河で有名なエティスカベルまでドライブした。氷河跡のがれきは背丈十七センチばかりの木々が育っていて、数千年後にはこの辺りも森林になるといふ。氷河湖に浮かんでいる氷の破片が、陽にキラキラと反射していた。

一日、ラフト・ツアー（ゴムボートの川下り）、買物（とても品物が豊富だ）、コインランドリーでの洗濯、などで過ごす。